

2025年度

慶應義塾大学入学試験問題

看護医療学部

小論文

- 注意
1. 受験番号と氏名を解答用紙の所定の欄にそれぞれ記入してください。
 2. 解答用紙は2枚です。解答は、必ず解答用紙の指定の欄によ^りて書^きで記入してください。解答欄外の余白、採点欄および裏面には一切記入してはいけません。
 3. この冊子の総ページ数は8ページです。問題文は3～5ページに書かれています。2ページ、7ページは下書き用紙です。試験開始直後、総ページ数および落丁などを確認し、不備がある場合はすぐに手を挙げて監督者に知らせてください。
 4. 不明瞭な文字・まぎらわしい数字は採点の対象としないので、注意してください。
 5. 問題冊子は試験終了後必ず持ち帰ってください。

《 指示があるまで開かないこと 》

次の文章は、細馬宏通著『介護するからだ』からの抜粋です。文章を読んで以下の設問にこたえなさい。

問題1. 下線(1)について、著者が「よいしょ問題」に関心を持ち、それについて調べることにした理由を170字から200字で述べてください。

問題2. 下線(2)について、「よいしょ」をどのように使うことで、「他人とやりとりするための道具」となるのでしょうか。本文の内容を踏まえて450字から500字で述べてください。

社会言語学が専門の早稲田大学のペート・バックハウスさんが、看護現場で用いられることばについて、おもしろい研究をしている。

話しことばを扱う言語学では、わたしたちがどんなことばを用いるかを調べるために、実際の語りや会話を大量に集めた資料である「コーパス」というものを用いる。このコーパスには、学会のプレゼンテーションで用いられる語りや、自分の経験を話す語りなど、いろいろな種類がある。バックハウスさんは、看護現場で交わされることばを文字起こしして、それを既存のコーパスと比べてみた。

すると、ある単語の頻度がまるで違うことに気づいた。

そのことばとは、「よいしょ」である。

既存のコーパスでは「よいしょ」はほとんど見られないのに対して、看護現場のデータでは第三位と、実によく使われるフレーズなのだそうだ。そういえば、私も介護現場で「よいしょ」をよく耳にする。看護や介護では、人の体を起こしたり支えたりする動作が多いせいかもしれない。

それにしても、「よいしょ」とは不思議なことばである。辞書を見ると「かけ声」「^{はやし}囃ことば」とあるものの、何が“よい”で、何が“しょ”なのか、さっぱりわからない。

わたしは最近、これを「よいしょ問題⁽¹⁾」と呼んで、介護現場をはじめいろいろな場面で、「よいしょ」がどんな動作と、どんなタイミングで結びついているのかを調べている。

まだまだ謎が多いが、いまの時点でわかっていることをいくつかここに書き留めておこう。

謎の一つは、「よいしょ」に伴う動作のタイミングが、人によって少しずつ違うことである。

たとえばある職員さんは、「よいつ」と言いながら重いもの（あるいは人）を持ち上げて、「しょ」で下ろす。別の職員さんは、「よいつ」で腰を沈めて「しょ」で持ち上げる。

よくよく見ると、持ち上げる行動が、一人でおこなわれているのか、誰かとおこなわれているのかによって違っている。誰かとおこなうときは、いきなり「よい」で持ち上げることは滅多にない。たいてい、「いくで、せーの」という具合にイントロがあるのだ。

このイントロの言い方によっても、よいしょの動作は変わってくる。

イントロの語尾が「せーの！」と強められると、「よい」で持ち上げが始まりやすい。一方、「いくで……よいつしょ」というふうにイントロの語尾が静かだと、「よい」は腰を沈める動作と一致しやすい。なかなか複雑なのである。

もう一つ興味深いのは、「しょ」という音である。ここに<sh>の音が入っていることによって、かけ声はより精妙になる。

サ行の冒頭の音、すなわち<sh>や<s>の音は、<k>や<t>や<p>のような子音と違って、「shhh……o」というふうに、いくらでも伸ばすことができる。おもしろいことに、何人かが共同作業をしている現場のかけ声を見ていくと、この<sh>や<s>の延長音が、お互いの動作のタイミングに関わっている例がいくつも見つかる。

たとえば、誰かとじゃんけんをする場面を思い浮かべてみよう。

最近のじゃんけんはたいてい「最初はグー」から始まる。もしあなたが、「最初はグー」と声をかけようとして、他の人がまだ腕を振り上げていないのに気づいたら、どうするだろうか？

一つの手段は、いきなり「最初はグー！」と言い切らずに、ことばの始まりの部分で待つことである。どうやって？

「最初」の「さ」のさらに冒頭、<s>の音を「sss……」と引き延ばしながら、腕を止めて他の人が追いついてくるのを待つ。<s>音に気づいた人があわてて腕を差し出しはじめたら、「sssさーいしょーはグー！」とそのタイミングでかけ声の続きを言う。これは実際によく見られる現象である。

持ち上げの「しょ」でも、似たことが起こる。

誰かと重いものを持ち上げるとき、「よいっしょ」の「よい」で腰を沈めた人は、他の人とタイミングを合わせて、同時に持ち上げ行動に移る必要がある。しかし、「しょ」と言おうとして、他の人が持ち上げている手応えが感じられなかったらどうするか？

実は「よいっしょ」の「っ」の部分で、多くの人はいくさくさの音を忍ばせており、この音の音量を変えながらお互いのタイミングをはかっている。先に力を入れはじめた人は、「よい s h h h ……」と延ばしながら、相手に力を入れるよう催促するのである。

なかなか相手からの力が感じられない場合は、「s h h h ……」の音をさらに大きくしていく。相手の力が入りはじめたなと思ったら、< s h >から< o >に移って「よい s h h h …… o !」と語尾をはっきり発音する。

このときにはもう重いものはぐいと持ち上がっている。

人によっては、「よい」を省略して「っしょ」とだけ言う人もいる。こうした人も、なぜか「しょ」の前に「っ」と言っている。いや、正確には「s h h h ……」と言っている。そのあいだに相手とのタイミングを調整するらしいのである。

もしかけ声が、「よいこ」や「よいと」や、はたまた「よいぽ」だったなら、こんなタイミング調節は起こり得なかったはずだ。

かけ声を、ただ一人の人間が自分に気合いを入れるための道具だと考えるだけでは、なぜそんな音韻になったのかうまく理解できない。しかし、かけ声を「他人とやりとりするための道具(2)」だと考えると、その構造は興味深いものになっていく。

最近、職員さんが誰かと何かを持ち上げはじめると、さっとビデオを構えるようになってしまった。もはや“よいしょハンター”である。

今日はどんな「よいしょ」が聞けるだろう。

<このページは白紙です>

